

suchungen sind jedoch äusserst spärlich. Darm hat Verfasser experimentelle Untersuchungen vorgenommen und kam dabei zu den folgenden Ergebnissen :

1) Azofarbstoffderivate wie Prontosil und Aktisol zeigen keine auffallende pharmakologische Wirkungen.

2) Sie wirken therapeutisch gegen experimentelle durch Staphylokokken und Colibazillen verursachte Sepsis und Peritonitis, denn sie ziehen in einem gewissen Graden durch diese Erkrankungen veranlassten Tod des Tieres hinaus oder sie vermindern auch die Mortalität. Sie sind viel wirksamer gegen Staphylokokken als gegen Colibazillen, sind aber weniger wirksam als gegen Streptokokken wie es in der Literatur angegeben wird. Ferner wirken sie stärker gegen Sepsis als gegen Peritonitis. Dagegen kann man bei experimentellen Infektionen durch Pneumokokken und Diphtheriebazillen keinen auffallenden Erfolg feststellen.

3) Die genannten Mittel zeigen ihre sterilisierende Wirkung gegen die Kulturprüfung von Staphylokokken und Colibazillen im Probierglas nur in hohen Konzentrationen.

4) Einführung von Prontosil und Aktisol in den Körper des normalen Kaninchens zeigt Neigung zur Beförderung der Blutsenkungsgeschwindigkeit. Die fördernde Blutsenkungsgeschwindigkeit bei experimenteller Sepsis und Peritonitis wird aber in einem gewissen Grad verzögert. Wenn man in einem solchen Fall die Wirkung dieser Präparate im Probierglas prüft, so zeigen sie, wie bei der sterilisierende Wirkung, die verzögernde Wirkung auf die Blutsenkungsgeschwindigkeit nur in sehr hohen Konzentrationen.

(Autoreferat)

103.

612.017.3

過敏症抗体變動ニ關スル研究

(第 2 報)

「ベンツオール」ト抗体量トニ就テ

岡山醫科大學柿沼内科教室

醫學士 横山 丈夫

[昭和13年8月19日受稿]

1章 緒言

1825年 Farady ノ「ベンツオール」發見以來 Simpson 及ビ Snow 氏ハソレノ中毒症狀ヲ始メテ記載シ Selling (1911) ハ「ベンツオール」ノ家兎造血臓器ヲ選擇的ニ障礙破壊スルコトヲ發表シ、其ノ後 Korangie, Hirschfeld, Jaffe 及ビ武藤氏等之ヲ治療的及ビ病理組織學的方面ニ用ヒ略ボ Selling ノ説ヲ肯定セリ。然ルニ Pappenheim, 多田羅氏等ハ造血臓器以外ニ多少ナガラ他ノ腺細胞ヲモ障礙スルヲ主張ス。「ベンツオール」ノ抗体形成ニ及ボス影響ヲ檢索セルハ Rusk (1914) ノ此物質ニ依リ溶血素、沈降素ノ發生ハ著シク害セラレトノ報告ヲ嚆矢トシ、後 Hekton (1916) モ多量ノ「ベンツオール」ハ抗体形成ヲ阻害シ少量ハ溶血素ノミヲ増スト云ヘリ。Schiff (1914) ハ「ベンツオール」ノ量ニヨリ過敏症ノ増衰アリト云ヒ Heinrich モ之ニ同意セリ。Hirschfeld (1913) Simond 及ビ Jones (1915), Busson 等ハ「ベンツオール」注射動物ハ菌ニ對シテ抵抗力減退スト唱ヘ、佐藤氏 (1928) ノ溶血性抗原ニ對スル抗体形成ハ「ベンツオール」ニテ害サル脾臓以外ノ造血臓器特ニ骨髓淋巴腺ニ重大ナル關係ヲ有スルヲ云ヒ、大熊氏 (1930) ハ「ベンツオール」ハ沈降素ノ新生ヲ障礙スルヲ認メ、小山氏 (1931) モ「ベンツオール」注射ハ一般ニ抗体產生ヲ或程度迄抑制スルヲ確證セリ。於茲余ハ「ベンツオール」ノ抗体形成ニ及ボス影響ヲ檢シ、更ニ「ベンツオール」ニ依リ被害破壊セラルル脾臓以外ノ造血器ニシテ而モ活動的ニシテ且抗体形成ニ密接ナル關係ヲ有スル骨髓ガ抗体生成ニ對シ如何ナル關係ニアルヤヲ究明セントシテ次ノ實驗ヲ行ヘリ。

第2章 實驗材料及ビ實驗方法

試驗動物トシテハ第1報ト同ジク常ニ 250—350 g ノ處女海猿ヲ用ヒ、抗原トシテハ健康馬血清ヲ使用セリ。「ベンツオール」(「メルク」製)ハ局方「オレフ油」ト等分ニ混合シ「ベンツオール

オレフ油」トシテ注射ニ供セリ。實驗動物ハ次ノ4群即チ

第1群 第1, 第2, 第4, 第5, 第7ノ各日「ベンツオールオレフ油」ヲ「ベンツオール」量ニシテ體重 pro kg 1 cc 宛注射シ、第3, 第6, 第8ノ各日健康馬血清 0.5 cc 宛注射セルモノ。

第2群 第1, 第2, 第4, 第5, 第7ノ各日ニ第1群ト同量ノ「ベンツオールオレフ油」ヲ注射シ、第8, 第10, 第12ノ各日健康馬血清 0.5 cc 宛注射セルモノ。

第3群 第1, 第2, 第4, 第5, 第7, 第8ノ各日ニ第1群ト同様「ベンツオールオレフ油」ニテ前處置シ第10, 第12ノ各日ニ更ニ半量 (pro kg 0.5 cc) 宛注射シ、第9, 第11, 第13日ニ健康馬血清 0.5 cc 宛注射セルモノ。

第4群 第1, 第2, 第3, 第4, 第5, 第6, 第8, 第10ノ各日ニ第1群ト同量ノ「ベンツオールオレフ油」ヲ注射シ、第7, 第9, 第11日ノ3回ニ互リ健康馬血清 0.5 cc 宛注射セルモノ。

以上ノ4群ニ分チ、各群ニ於テ最後ノ血清注射翌日ヨリ各々第7, 第9, 第11, 第13, 第15, 第21, 第30日目ニ第1報ニ述ベタルト同様ノ方法ヲ以テ海猿ヨリ採血シ、且子宮體ヲ利用シ、子宮過敏症ヲアラハス曲線ヲ描カシメ抗体量ヲ測定セリ。又瀉血ニテ得タル血液ニ就テ血中沈降素價ヲ緒方氏法及ビウーレンフート氏法ニヨリ測定スルコト第1報ト同様ナリ。尙ホ各群動物ニ就テ第10日目「ピロカルピン」及ビ「アドレナリン」注射ヲナシ血中抗体量及ビ子宮内抗体量ニ及ボス影響ヲ檢セリ。

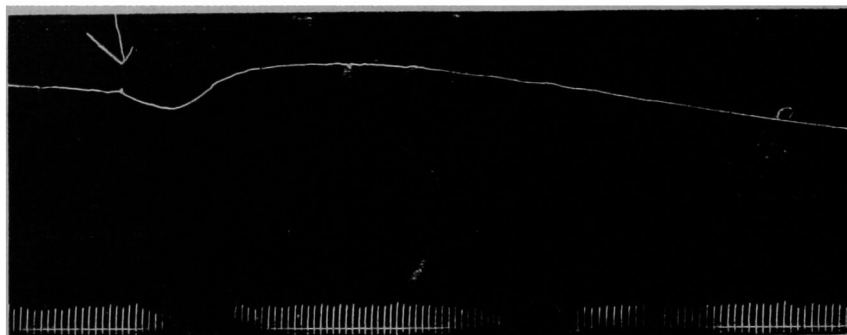
第3章 實驗成績

前述ノ各群各日ノ實驗ニハ各々3—5例宛實驗シ、子宮過敏症ヲ表ス曲線ハ中等大ノ代表的ノモノヲ選ビ、血中抗体量ハ平均値ヲ求メテ次ノ如キ成績ヲ得タリ。

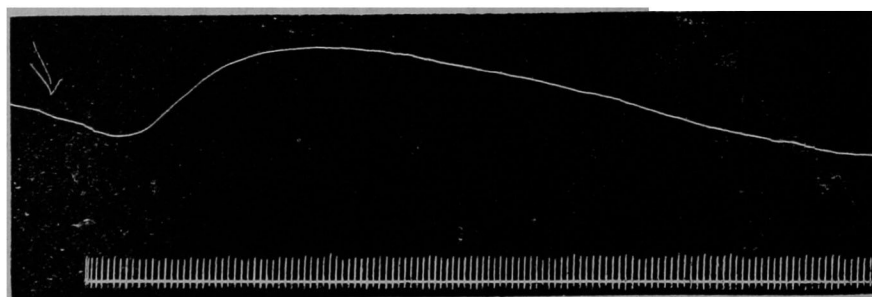
第1節 子宮内過敏症抗体ニ關スル成績

第 1 群

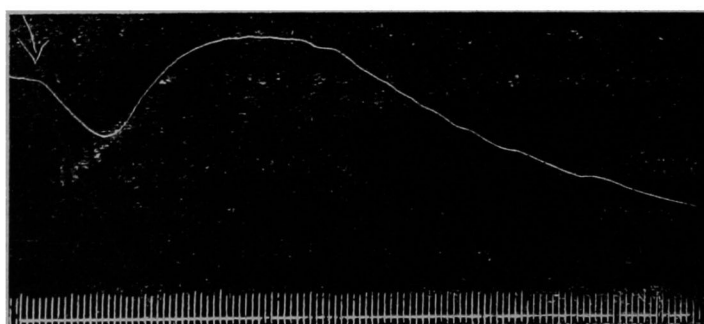
第 1 圖 (第 7 日 目)



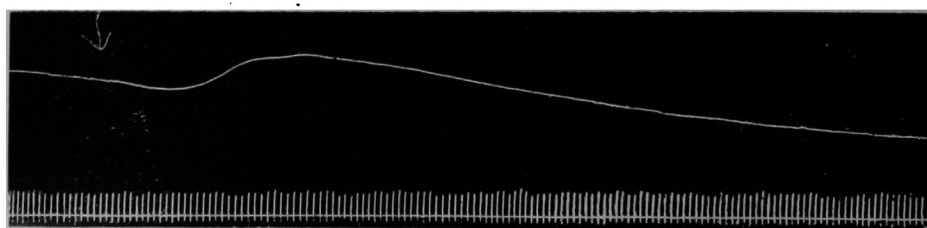
第 2 圖 (第 9 日 目)



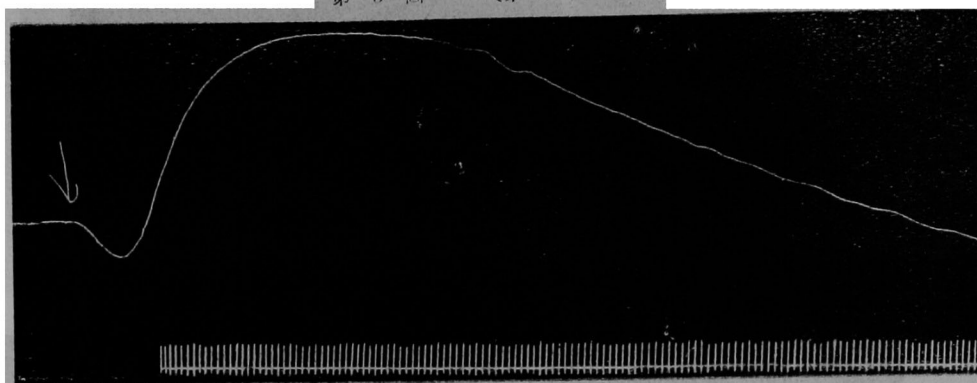
第 3 圖 (第 11 日 目)



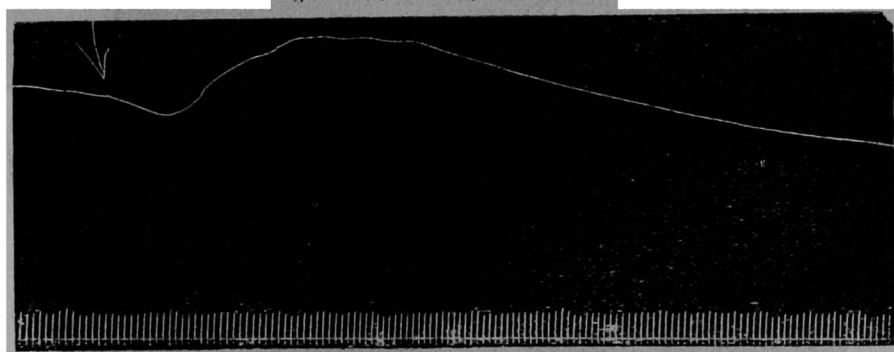
第 4 圖 (第 13 日 目)



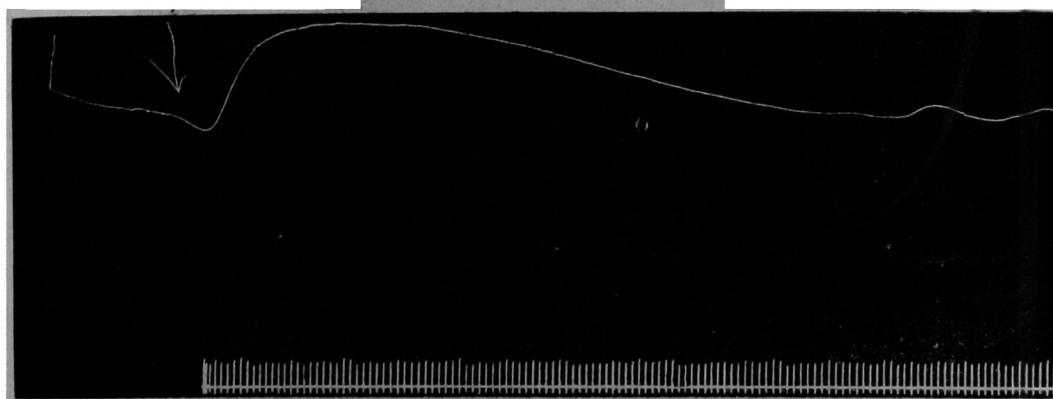
第 5 圖 (第 16 日 目)



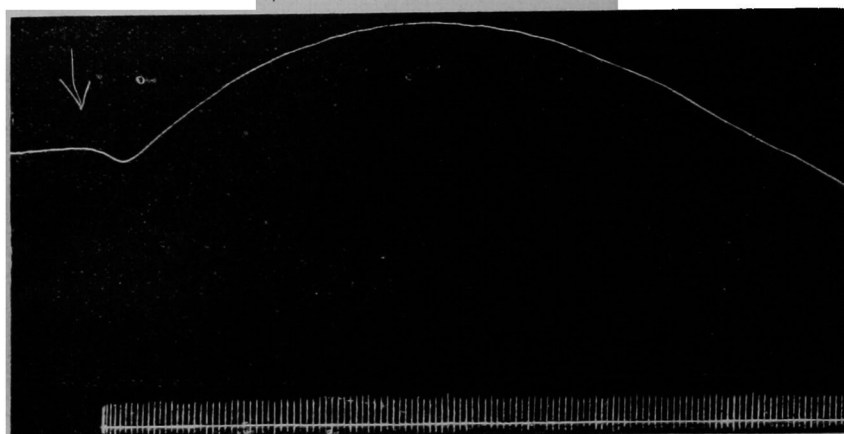
第 6 圖 (第 21 日 目)



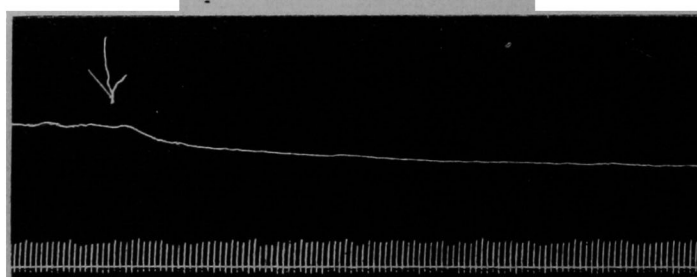
第 7 圖 (第 30 日 目)



第 8 圖 (「ピロカルピン」)

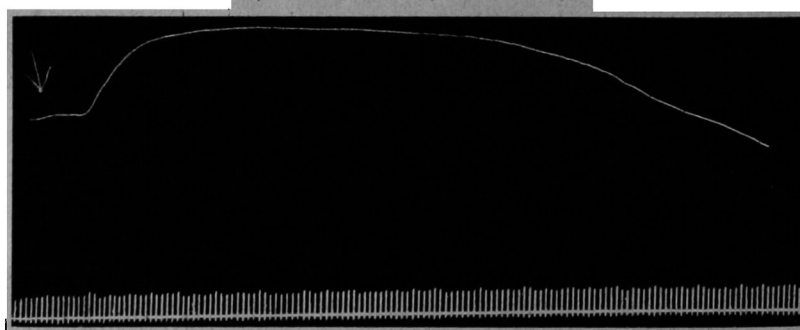


第 9 圖 (「アドレナリン」)

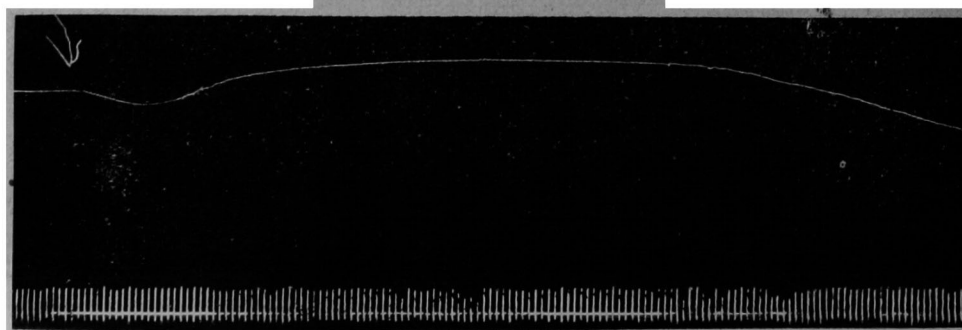


第 2 群

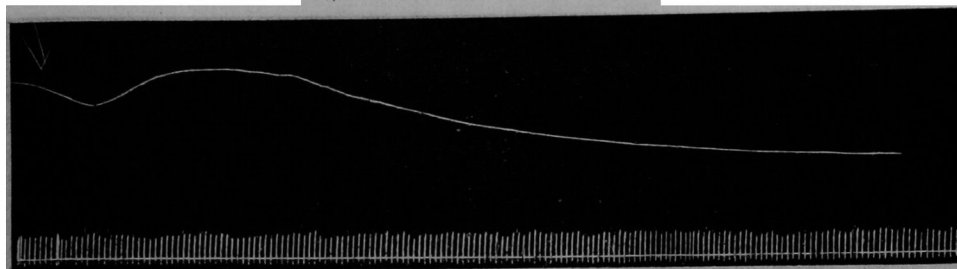
第 10 圖 (第 7 日 目)



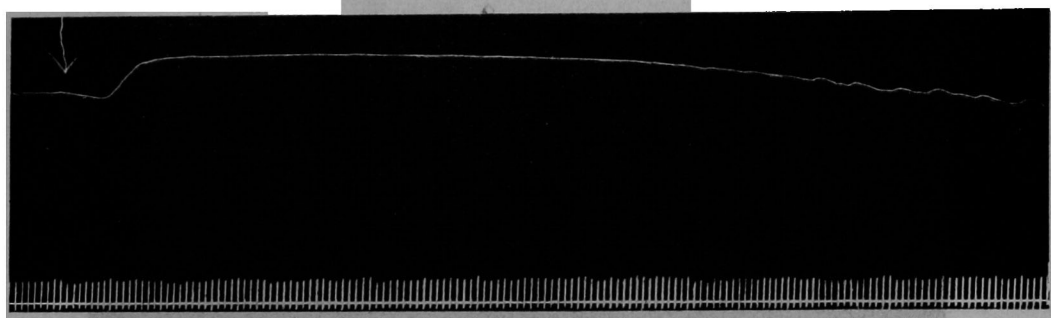
第 11 圖 (第 9 日 目)



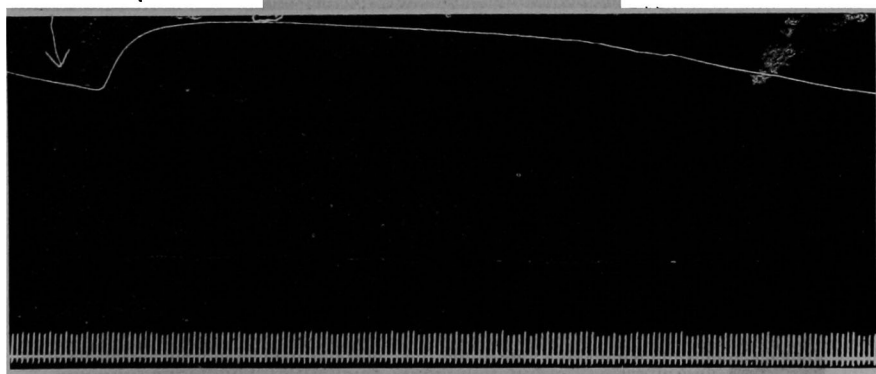
第 12 圖 (第 11 日 目)



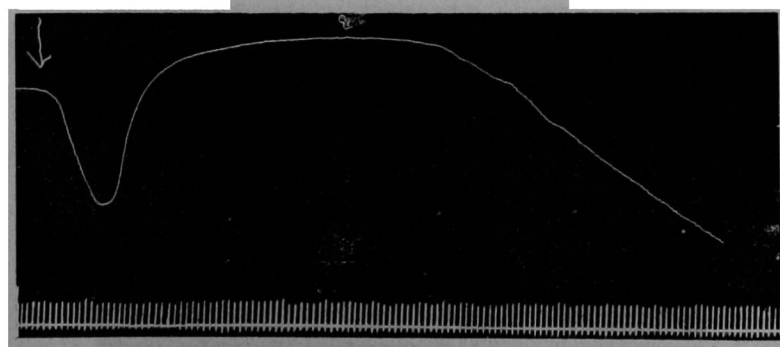
第 13 圖 (第 13 日 目)



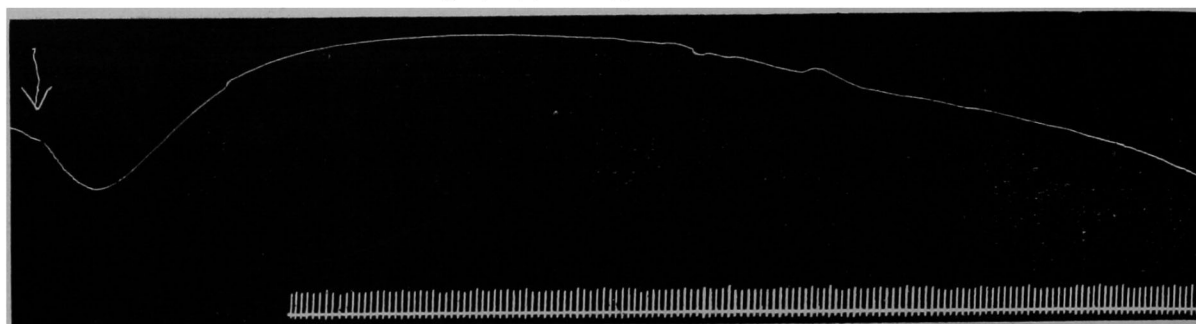
第 14 圖 (第 16 日 目)



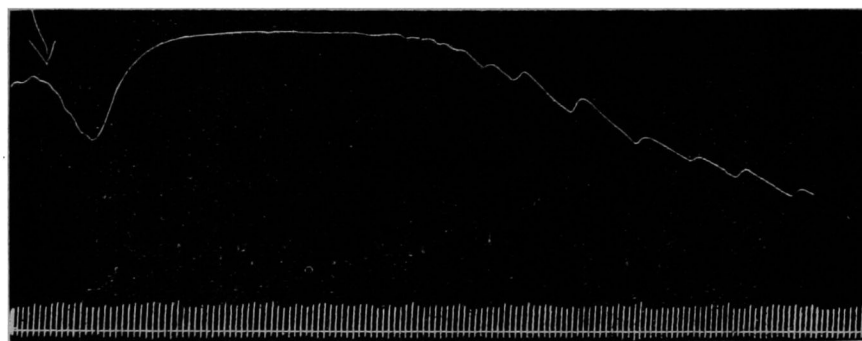
第 15 圖 (第 21 日 目)



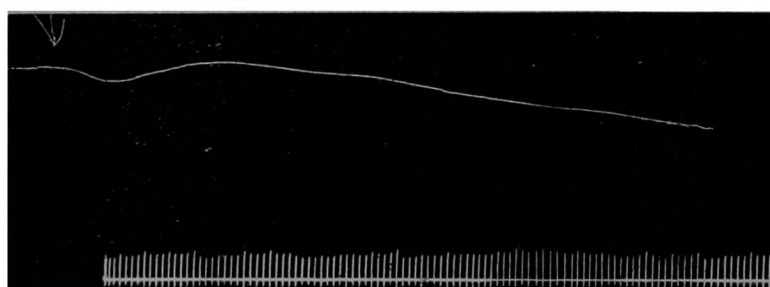
第 16 圖 (第 30 日 目)



第 17 圖 (「ピロカルピン」)

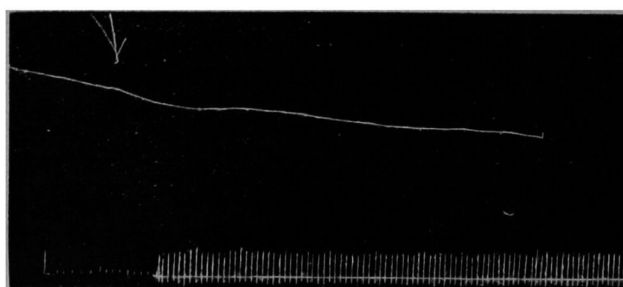


第 18 圖 (「アドレナリン」)

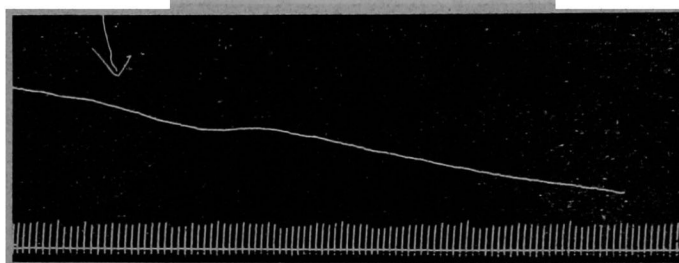


第 3 群

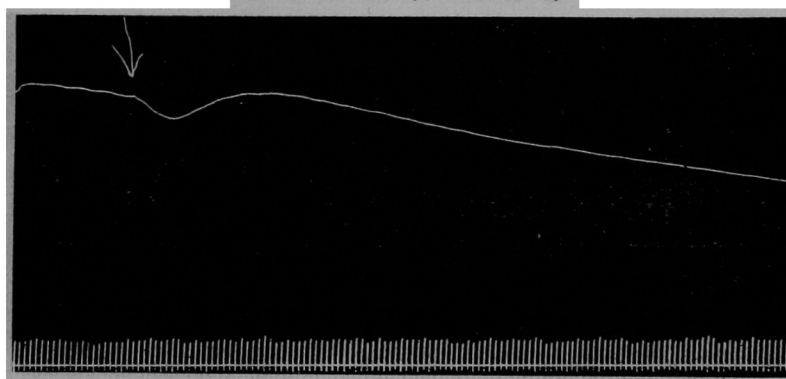
第 19 圖 (第 7 日 目)



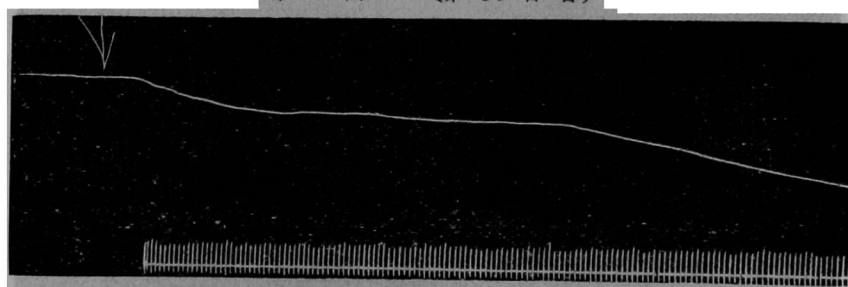
第 20 圖 (第 9 日 目)



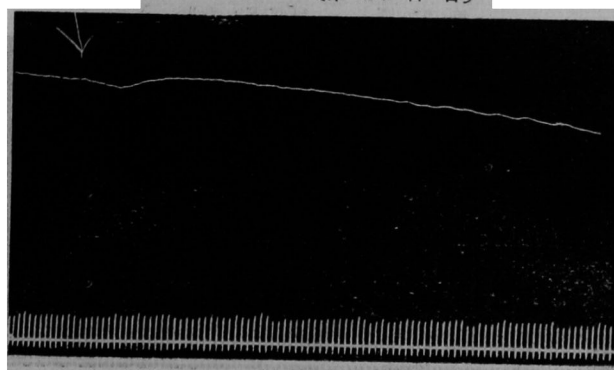
第 21 圖 (第 11 日 目)



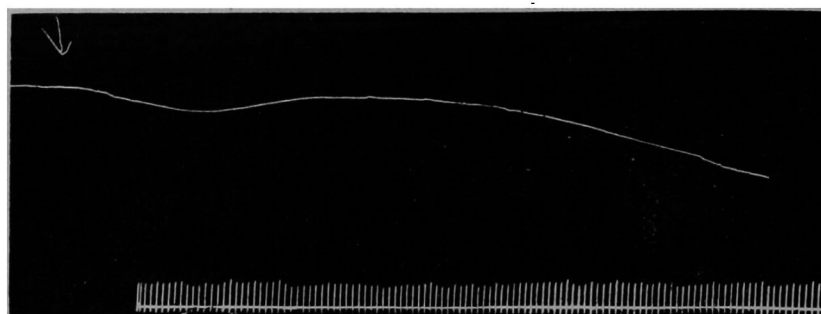
第 22 圖 (第 13 日 目)



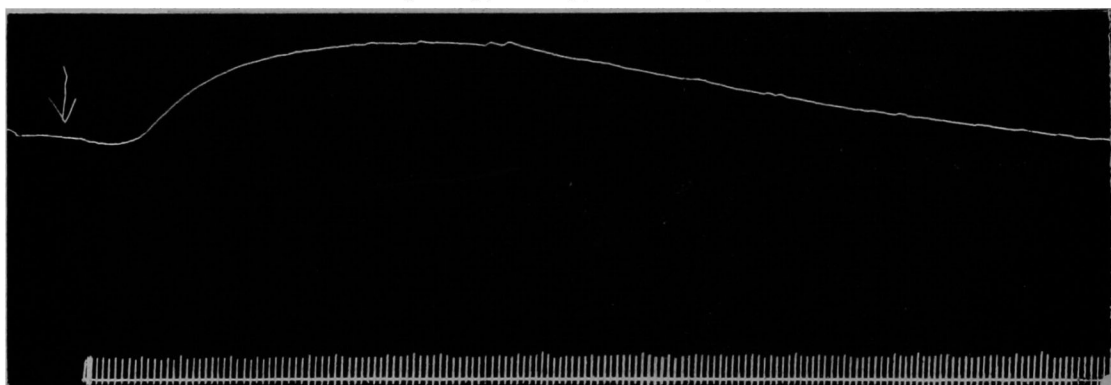
第 23 圖 (第 16 日 目)



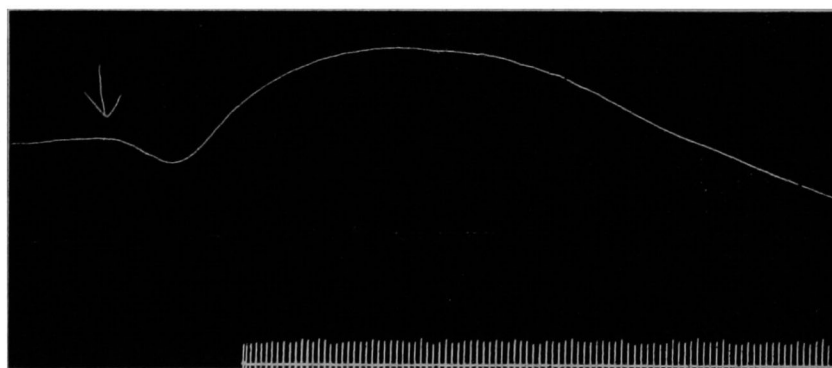
第 24 圖 (第 21 日 目)



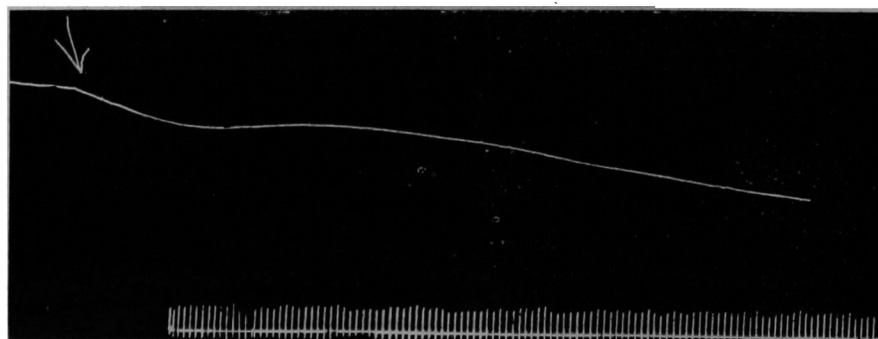
第 25 圖 (第 30 日 目)



第 26 圖 (「ヒロカルビン」)

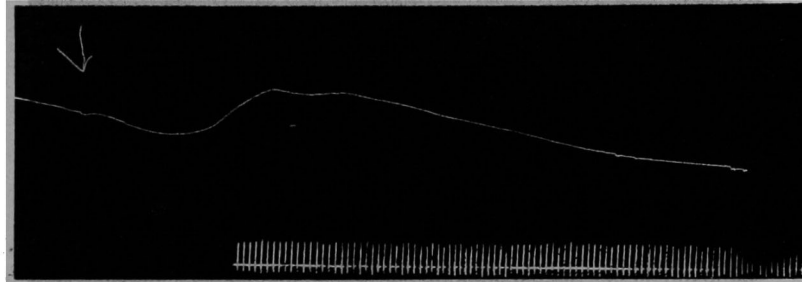


第 27 圖 (「アドレナリン」)

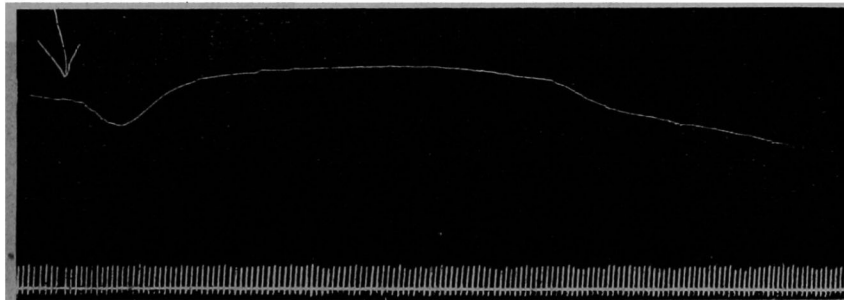


第4群

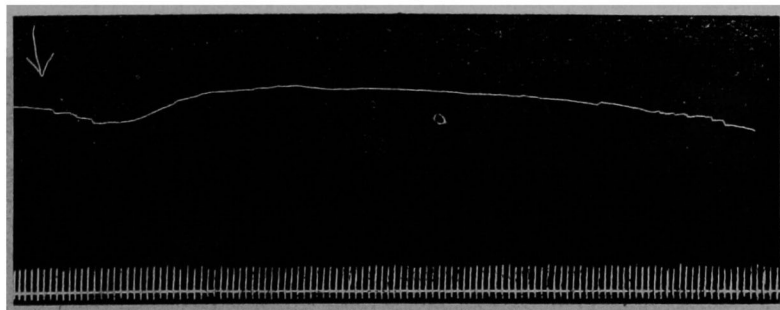
第28圖 (第7日目)



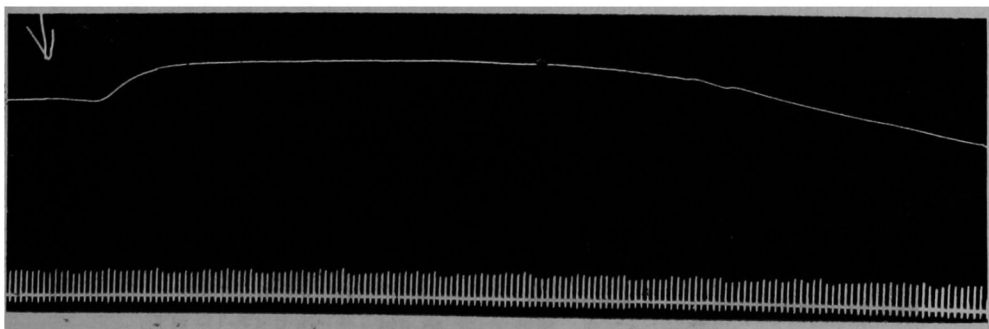
第29圖 (第9日目)



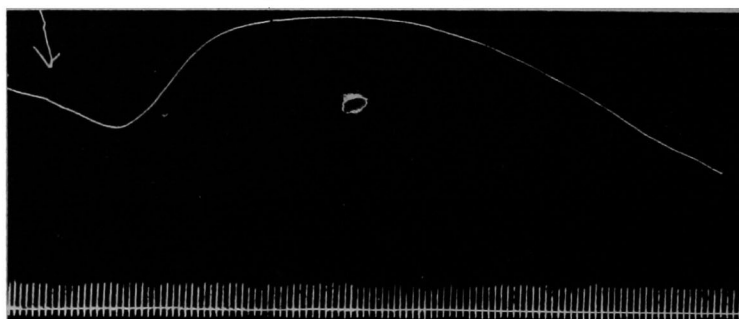
第30圖 (第11日目)



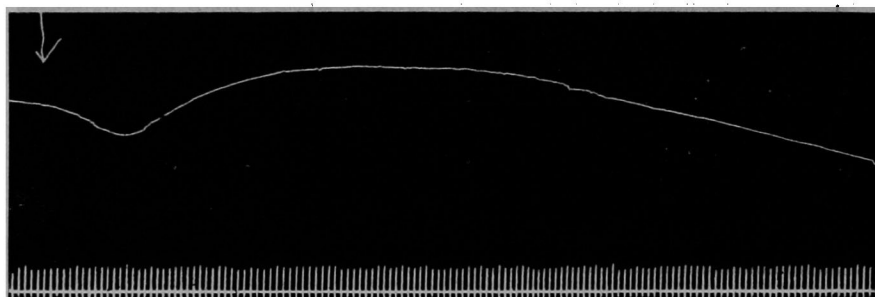
第31圖 (第13日目)



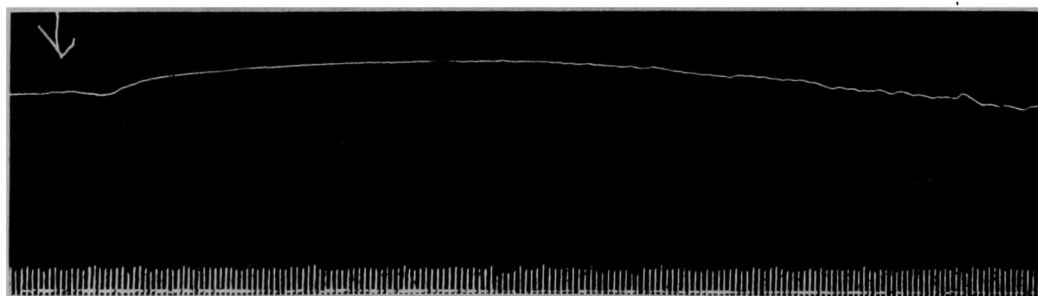
第 32 圖 (第 16 日 目)



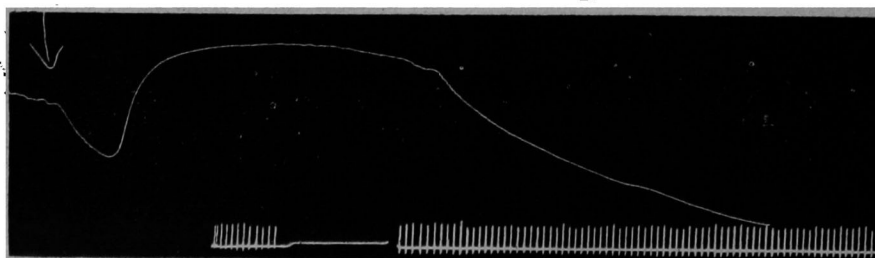
第 33 圖 (第 21 日 目)



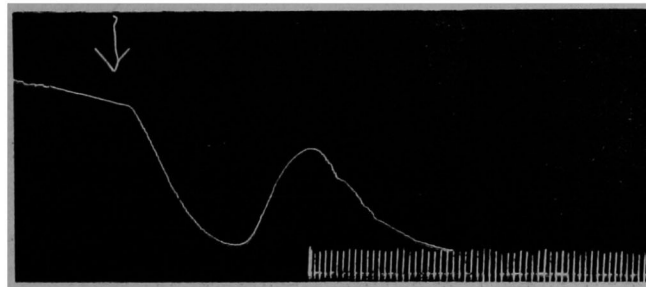
第 34 圖 (第 30 日 目)



第 35 圖 (「ピロカルピン」)



第 36 圖 （「アドレナリン」）



以上ノ子宮過敏症ヲ表ス各々ノ曲線ノ縦、横及
ビ面積ヲ第1報ト同様ニ計測シ之ヲ總括表示スレ

第 1 表 子 宮 内 抗 體 量

種 類	注射 様式	経過日数	7	9	11	13	16	21	30日	10日	
										「ピロカ ルビン」	「アドレ ナリン」
第 1 群	B B S B S B S	面積(cm ²)	2	4	3	1	12	3.5	4.5	7.5	(一)
		縦(cm)	0.5	1.2	1.3	0.5	3.0	1	1.3	1.8	(一)
		横(cm)	0.5	8	5	4.5	11.5	8	8	9.2	
第 2 群	B B O B B O B S O S O S	面積(cm ²)	5.5	3.5	1	3	4.5	8	12	5	0.8
		縦(cm)	1.2	0.7	0.4	0.5	1	2.3	2.0	1.4	0.2
		横(cm)	8.5	10	4	10	11	7.5	14.5	7.0	4
第 3 群	B B O B B O B S B' S B' S	面積(cm ²)	0	0	1	0	0.5	0.8	6	5	0.5
		縦(cm)	0	0	0.4	0	0.2	0.2	1.3	1.5	0.1
		横(cm)	0	0	4.0	0	3.8	4.0	14	7.5	3
第 4 群	B B B B B B S B S B S	面積(cm ²)	1.5	3.5	2	3	5	4	2.5	5	1.3
		縦(cm)	0.6	0.8	0.5	0.6	1.5	1	0.5	1.5	1.2
		横(cm)	5	8.5	7.5	10	7.5	9	11	6.0	2.5

註： { B = 「ベンツオール」 pro kg 1.0 cc 注射 B' = 0.5 cc 注射
S = 健康馬血清 0.5 cc 注射
O = 注射セザルヲ示ス

第1表ヲ參考トシテ第1—第36圖ノ子宮過敏症
ヲ表ス曲線ヲ以テ子宮内抗體量ヲ推定スレバ大體
ニ於テ第1群最大ニシテ第2群ト第4群トハ殆ド
同ジクシテ之ニ次ギ第3群最小ナリ。即チ「ベン
ツオール」注射＝血清注射ノ遅ルル程子宮内抗體
量小ナル結果トナレリ。又各群ニ於テ子宮内抗體
量最大トナレル實驗日ヲ見ルニ第1群、第4群ニ
於テハ第16日目、第2群及ビ第3群ハ第30日目
ナリ。即チ抗原注射ノ「ベンツオール」注射＝遅ル
ル程（換言スレバ血清注射＝先チテ「ベンツオー

ル」中毒ノ充分ナル程）抗原注射後抗體量最高價
ニ達スル迄ニ要スル日數延長スルガ如シ。次ニ各
群ニ於テソレゾレ第9日目ノモノニ比較シテ「ビ
ロカルビン」注入後ハ然ラザルモノニ比シ増量シ、
「アドレナリン」注入後ハ之ニ反ス。各群ニ就テミ
レバ「ビロカルビン」注入後第1群最大ニシテ他ノ
3群ハ殆ド同等ニシテ之ニ次グ。「アドレナリン」
注射後ハ常ニ減ゼリ。

第2節 血中沈降素價ニ關スル成績

第2表 血中沈降素價（絶對値）

種 類	注射 機式	経過日數		7	9	11	13	15	21	30日	10日	
		緒方氏法	沈降素價								「ビロカルビン」	「アドレナリン」
第 1 群	B B S B B S B S	緒方氏法	沈降素價	4	8	4	4	32	4	4	23	6
			結合帶	50	50	100	100	50	50	25	50	100
		ウーレンフート氏法		100	250	250	250	250	250	250	250	250
第 2 群	B B O B B O B S O S O S	緒方氏法	沈降素價	23	8	5	6	5	9	19	17	6
			結合帶	50	50	100	50	25	25	25	50	100
		ウーレンフート氏法		250	250	250	250	250	250	500	500	250
第 3 群	B B O B B O B S B S B S	緒方氏法	沈降素價	6	2	5	2	2	4	17	10	6
			結合帶	100	50	100	50	50	50	25	50	25
		ウーレンフート氏法		250	100	250	100	100	100	250	250	250
第 4 群	B B B B B B S B S B S	緒方氏法	沈降素價	4	8	13	13	21	10	5	8	4
			結合帶	25	50	25	25	25	10	10	25	50
		ウーレンフート氏法		250	250	250	250	250	100	50	100	100

上表ニヨレバ血中沈降素價ハ緒方氏法ニ於テ大體第1群ニ最大ニシテ、第4群、第2群之ニ次ギ第3群最小ナリ。即チ之モ子宮内抗體量ト同様ニ血清注射ノ「ベンツオール」注射ニ遅ル程血中抗體量小ナリ。又各群ニ於テ血中沈降素價ノ最大トナレル實驗日ヲ見ルニ子宮内抗體量ト同様ニ第1群、第4群ハ第16日目第2群、第3群ハ第30日目はシテ抗原注射ノ「ベンツオール」注射ニ遅ルニ從ヒ血中沈降素價ノ最高價ニ達スル迄ニ要スル日數延長セリ。次ニ各群9日目ノモノト比較スルニ「ピロカルビン」注入後ハ常ニ増加又ハ同等ニシテ、其ノ程度ハ第1群ニ最大ニシテ第2群之ニ次ギ、第3群、第4群ノ順ニ減少セリ。即チ「ベンツオール」注射全量ノ大ナル程「ピロカルビン」ノ影響ヲ受クルコト少ク血中抗體量小ナリ。「アドレナリン」注入後ニ於テハ第1、第2、第3群同等ニシテ第4群最小ナリ。而モ第3群ヲ除キテハ他ハ何レモ減少セリ。結合帶ハ第1、第2、第3群各々大同小異ナルモ第4群ハ最低値ヲ示セリ。又結合帶ハ「ピロカルビン」、「アドレナリン」ニヨリテハ大ナル影響ヲ受ケザルガ如シ。Uhlenhuth氏法ニヨレバ大體ニ於テ第1、第2、第3群同等ニシテ第4群ニ最小ナリ。ウ氏法ニテ感作ノ大凡ノ傾向ヲ知り得ルモ、ウ氏沈降原價ノ大ナルモノ必ズシモ緒方氏法ノ示ス高キ免疫價ヲ有セザルコト第1報詳述ノ如シ。

第4章 總括及ビ考按

「ベンツオール」ト抗體形成トノ關係ニ就テハ既ニ緒言ニ述ベタル如ク諸氏ニヨリテ研究サレ何レモ「ベンツオール」ノ少量ハ抗體形成ヲ刺激シ、其ノ多量ハ抑制スト云フ說ニ一致スル所ナリ。余ノ實驗ニ於テ子宮内抗體量、血中抗體量ヲ見ルニ血清注射ニ先チ「ベンツオール」中毒ノ充分ナルホド抗體形成ハ強く障礙サルノ結果トナレルガ、之ハ佐藤氏ノ述ベタルガ如ク、脾臟以外ノ造血臟器特ニ骨髓ノ「ベンツオール」ニヨリ障礙サレ抗體

形成ノ障礙ヲ來シタルモノト思惟サル。又抗原注射ノ「ベンツオール」注射ニ遅ル程即チ「ベンツオール」中毒ノ充分ナル程抗體量最高價ニ達スル迄ニ要スル日數延長スルヲ知ル。之モ佐藤氏ノ說ニ一致スル所ナリ。次ニ植物神經系統ト抗體形成トノ關係ニ就テハ第1報ニ述ベタルガ如ク副交感神經ノ緊張ハ生體ノ抗體產生機能ヲ高メ、反之交感神經ノ緊張ハ之ガ機能ヲ抑制スト云フコトニ至致スルガ如シ。余ノ實驗成績ニ於テ「ゼロカルビン」注入後ハ、血中並ニ子宮内抗體量ハ何レモ「アドレナリン」注入後ニ比シ増加シ、而モ「ベンツオール」注射全量ノ大ナル程、換言スレバ中毒強キ程其ノ増加ノ程度小ナリ。「アドレナリン」注入後ハ兩抗體量共殆ド常ニ減少セリ。過敏症抗體ノ血液並ニ組織内含量ニハ從ツテ「ベンツオール」ニテ障礙サル脾臟以外ノ造血臟器殊ニ骨髓ノ機能如何ノ外「ピロカルビン」注入等モ關係ス。

以上ノ事實ハ第1報詳述ノ如ク主シテ細胞性機轉ト考ヘラルル血液組織間物質交代現象ガ植物神經毒其ノ他ニヨリ一定方向ニ影響サルモノナラン。尙ホ又「ピロカルビン」注入後短時間ニシテ、子宮内及ビ血中抗體量ノ急増スルハ過敏症抗體ガ神經毒其ノ他ノ作用ニヨリ血液組織ニ急ニ移動サルモノト思ハル。コレハ既ニ第1報ニ發表セル所ナリ。脾臟ノ骨髓ニ對スル作用ニ就テハ從來相反スル2説ガ對立シテ永ク論爭サレHirschfeld一派ノAscher氏及ビ其ノ門下Vogel, Duobois, Roese, 中尾氏等ハ脾臟ハ骨髓ノ造血機能ニ對シテ抑制作用ヲ及ボスモノナリト稱スルニ反シ、Eppinger氏一派即チPearce及ビ其ノ門下(Krumbbar, Musser, Anstin等), Istomanowa等ハ脾臟ハ骨髓造血機能ニ對シテ促進作用ヲ有スト。我ガ教室ノ蓮池氏(1928)ハ正常脾臟ハ骨髓ノ赤血球新生機能ニ對シテ抑制的調節作用ヲ及ボセルノミナラズ、恐ラク白血球新生機能ニ對シテモ亦同様ノ作用アルモノト信ズト。余ノ實驗ニ於テモコノ關係ヲ見出し得ルガ如ク、即チ「ピロカル

ビン」注入後ハ血中及ビ子宮内抗體量共ニ「ペンツオール」中毒充分ナル程、即チ脾臓以外ノ造血臓器特ニ骨髓ガ強ク害サルホド其ノ増加ハ小トナル。此事實トサキニ第1報ニ發表セル別脾後感作動物ハ「ピロカルビン」注入後ニ於テ正常動物感作ニ於ケルヨリ血中及ビ子宮内抗體量共ニ大トナレ成績トヨリ按ズルニ、過敏症抗體ガ或貯蔵所ヨリ血液組織間ニ移動スルニ際シ、正常脾臓ハ骨髓ノ促進的作用ニ對シテ抑制的調節作用ヲ及ボスモノト信ゼラル。然レドモ尙ホコノ血液組織間物質交代現象ニ於テハ諸種ノ因子即チ細小血管ノ變性、血液膠質化學的變化及ビ種々ノ内分泌臓器ノ狀態等ノ關與スベキハ Bauer n. Aschner, Saxl u. Donath, 藤田氏、野間氏、龜山、森正兩氏等諸氏ノ業績ヨリ推シテ想像ニ難カラズ。

第5章 結 論

1) 馬血清注射ニ先ダチテ「ペンツオール」中毒ノ強キ程抗體形成ハ強ク障礙サレ、而モ抗原注射後抗體最高價ニ達スル迄ニ要スル日數延長スルヲ知ル。

2) 「ピロカルビン」(1% 1 cc) 注入 30 分後ハ血中及ビ子宮内抗體量ハ共ニ「アドレナリン」(0.1% 0.5 cc) 注入後ニ比シテノミナラズ、殆ド常ニ増加スルモ、其ノ價ハ注入セル「ペンツオール」全量ノ大ナル程小ナリ。又「アドレナリン」注入 30 分後ニハ兩抗體量何レモ殆ド減少ス。

擧筆スルニ當リ終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜リシ恩師柿沼、北山兩教授ニ深謝ス。

主 要 文 獻

1) *Selling*, *Zieglers Beiträge*, Bd. 51, 1911. 2) *Pappenheim*, W. *Kl. Woch.*, 1913. 3) *Rusk*, Universität Cali. f. Publ. in Path., 1921. 4) *Schiff*, *Zeitsch. f. Immunitätsf.*, 1914. 5) *Heinrich*, *Zent. für Bakt.*, Bd. 70. 6) *Hektoen*, *Jour of Infek. Dis.*, Vol. 19, P. 69 u. P. 733, 1916. 7) *Simond u. Jones*, *Jour. Med. Research*, Vol. 33, 1915. 8) *Bussan*, *Zeitsch. f. Gesamt. Exp. Med.*, Bd. 9, Heft 56. 9) *Hirschfeld und Klemperer*, *Therapie d. Gegenw.*, S. 385, 1913. 10) *Hirschfeld u. Weinert*, B. *Kl. Woch.*, Nr. 22, 1914. 11) *Eppinger*, B. *Kl. Woch.*, S. 107, 1572. 2409, 1913. 12) *Derselbe*, *Die heptolienale Erkrank.*, 1929. 13) *Ascher*, D. *Med. Woch.*, S. 1251, 1911. 14) *Ascher und Sallberger*, *Derselbe*, Bd. 55, S. 386, 1913. 15) *Ascher u. Vogel*, *Derselbe*, Bd. 43, S. 386, 1912. 16) *Ascher u. Dubois*, *Bioch. Zeit.*, Bd. 82, S. 141, 1917. 17) *Nakao*, *Bioch. Zeit.*, Bd. 166, 1925. 18) *Roesse*, *Z. f. Kl. Med.*, Bd. 102, 1926. 19) *Pearce*, *Ed-*

ward, John, Musser, J. of *Exp. Med.*, Vol. 16, 1913. 20) *Istomanowa, Mjassnikow u. Swjastkaja*, *Z. f. d. ges. exp. Med.*, Bd. 52, 1926. 21) *Bauer u. Aschner*, *Zeit. f. exp. Med.*, Bd. 27, 1922 und *Deutsch. Arch. f. Kl. Med.*, Bd. 138, 1922. 22) *Saxl u. Donath*, W. *Arch. f. Inner. Med.*, Bd. 13, 1926. 23) 武藤, 滿洲醫學會雜誌, 第15卷, 第5號, 617, 昭和6年. 24) 多田羅, 實驗醫學, 第7卷, 大正12年. 25) 佐藤, 社會醫學雜誌, 第492號, 昭和3年. 26) 小山, 熊本醫學會雜誌, 第6卷, 第11號, 1171, 昭和5年; 第12號, 1289, 第7卷, 第1號, 16, 第7卷, 第7號, 649, 第7卷, 第8號, 846, 昭和6年. 27) 三田, 日本傳染病學會雜誌, 第5卷, 101, 昭和6年. 28) 大熊, 日本微生物學病理學會雜誌, 第24卷, 第9號, 29) 藤田, 植村, 岡醫雜, 第40年, 第5號. 30) 蓮池, 岡醫雜, 第40年, 第4號. 31) 龜山, 岡醫雜, 第46年, 第6號. 32) 野間, 岡醫雜, 第443號, 大正15年. 33) 三田, 血清學領域ニ於ケル新知見. 34) 藤田, 日本消化器病學會雜誌, 第26卷.

*Aus der Med. Klinik der Medizinischen Fakultät Okayama
(Vorstand: Prof. Dr. K. Kakinuma und Prof. Dr. K. Kitayama).*

Experimentelle Beeinflussungen des anaphylaktischen Antikörpers.

(2. Mitteilung)

Über den Einfluss von Benzol auf die Antikörpermenge.

Von

Dr. Takeo Yokoyama.

Eingegangen am 19. August 1938.

Indem ich Benzol- und Pferdeseruminjektion auf verschiedene Weise zusammenfügte, sensibilisierte ich Meerschweinchen. 7–8 Tage nach der Sensibilisierung wurden die Menge der Antikörper im Uterus nach dem Daleschen Verfahren bestimmt. Nachdem ich mit den Werten des Präzipitins im Blute verglichen und die dabei zur Geltung gekommenen Einflüsse von seiten des Pilokarpin, etc. untersucht hatte, gelangte ich zu folgenden Schlüssen:

(1) Je weiter die Benzolvergiftung vor der Pferdeserum-Injektion vorgeschritten ist, desto stärker wird die Antikörperbildung gestört, wobei zu beachten ist, dass sich die Zeit verlängert, die nötig ist, bis höchste Wert der Antikörper nach der Antigen-Injektion erreicht wird.

(2) 30 Minuten nach der Pilokarpin-Injektion (1%, 1cc) vermehrt sich die Antikörpermenge im Blute und Uterus stets stärker als nach der Adrenalin-Injektion (0,1%, 0,5 cc). Obwohl meistens zunimmt, ist der Wert um so kleiner, je grösser die Gesamtmenge des eingegossenen Benzols. Ferner nimmt die Menge des Antikörpers im Uterus sowie im Blute 30 Minuten nach der Adrenalin-Injektion meistens ab. (Autoreferat)